

「塵埃」論：塵労生活と「予」の形象をめぐる

瓜生, 清
北九州大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/12051>

出版情報：語文研究. 52/53, pp.136-143, 1982-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「塵埃」論

——塵勞生活と「予」の形象をめぐる——

瓜 生 清

明治四十年、正宗白鳥は一躍文壇の寵児になった感がある。十一月号の「趣味」・「新声」・「文庫」・「明星」の諸雑誌は、競って第一創作集『紅塵』（彩雲閣、明40・9）を合評する。その『紅塵』に収録された「塵埃」（「趣味」明40・2）は、新進作家白鳥の名を喧伝した記念すべき出世作であった。その反響の一端を同時代評で一瞥すると、島村抱月は、三月号の「早稲田文学」で「我が作界にあつては、蓋し此の一二月にわたつての佳品である。」（「思ひより」）といち早く称揚し、続いて諸雑誌の合評がほとんど「塵埃」は集中の傑作である（「長江生」「紅塵」を読む）「趣味」明40・11と賞賛して、抱月の評価を確定する。

同時代の賛辞に包まれた「塵埃」は、白鳥の内部の問題と時代的好尚とがいかに合致していたかを窺える恰好の作品と言わねばならない。

（一）

白鳥は後年の「『処女作』の回顧」（「文章世界」大5・5）で、

出世作「塵埃」について次のように語る。

日露戦争後に文芸の方面にも新しい気運が起つて新しい雑誌が頻りに発刊されるにつれて、私も雑誌社の需めに応じて筆を執る機会が多くなり、何の抱負もなく書いたものが意外な好評を得て、知らず／＼文芸を一生の事業とする人間になりました。

彼一流の無愛想な回想である。出世作を「何の抱負もなく書いた」とそつけない言い放つ文面は、型破りでもある。ここには、白鳥の含羞と七年間読売新聞の記者生活の中でジャーナリズムの実態を見て来た彼の冷眼もあろう。このような事情を考慮に入れても、ここには白鳥の真意が十分に語り尽くされているか疑問が残る。「文壇的自叙伝」四（「中央公論」昭13・5）によると、「紅塵」は最初好評であった「塵埃」の題名をそのまま使う予定であったが、「塵埃」といふ言葉はあまりに殺風景なので、ふと思ひ直して紅塵と変更した。」という重要な経緯があった。題名決定までの経過を見ても、「塵埃」は相当の「抱負」をもって執筆された作と見る方が自然だろう。

さらに不可解なことは、「塵埃」が日露戦後の文学界の「新しい

氣運」と無関係であるかのように回想していることである。白鳥と同時代文学との関係を眺めると、彼は積極的に「新しい氣運」に掉ささんとする意欲に満ちている。漱石・藤村、独歩がめざましく進出し、長らく沈黙していた二葉亭の復活が続いた明治三十九年の重大な転換期を分析した「漱石と二葉亭」（『文章世界』明40・1）を一例にあげられるし、旧套を脱した自然主義の実作を積極的に肯定する発言（「虚無思想の発芽」、「文章世界」明40・12）もある。時代思潮に進んで積極的な発言を続ける白鳥と「塵埃」のモチーフが無関係であったとは考え難い。

(二)

「塵埃」は、読売新聞社に勤務していた記者時代の見聞をもとに「新聞社の校正掛を材料とした」（前掲「『処女作』の回顧」）作である。モデルとなった実在の人物については、同僚で親交のあった上司小剣が「U新聞年代記」（中央公論社、昭9・3）や「正宗白鳥論」（「新潮」昭9・6）に伝えている。特に後者は詳しく、重要な証言を含む。上司はその白鳥論で、白鳥と自然主義文学の関係について次のように述べている。

この塵埃的生活をしてゐる平凡人中の平凡人の胸の肉一片が、当然自然主義の洗礼を受けたばかりの正宗君のメスによつて、血の滴るままに切り取られたのは、猫の前に置かれた鯉節が衝へられたのと同様、むしろ当然のことであつた。

この巧みな比喻によると、「塵埃」は唐突な所産ではなかった。創作のモチーフは自然主義の精神と軌を一にして醗酵してゆく関係

にあった。ちょうど「塵埃」が書かれた明治三十九年当時、現実精神の深化は、評論・創作において生活の現実を深く問い直すことになる。「平凡人」の味気ない日常、塵勞生活を描いた「塵埃」は、藤村などの発言に見られる文学界の動向とかかわっている。藤村は「破戒」（明39・3）の一特色が「種々なる生活状態」（「破戒」広告文、「新小説」明39・3）の叙述にあったことを明言していた。その藤村が、空前の反響を呼んだ「破戒」の直後の談話「緑蔭雑話」（「読売新聞」明39・4・9）で、今後の文学について「従来小説等には全然看過されて居た生活問題の如きも、将来は甚深な関係を以て描かれるでありませう。」と予測している。これは、暗に「破戒」がこれまで十分に掘り下げられなかった「生活問題」に先鞭をつけた作であると自負していたことを示すものだろう。「緑蔭雑話」と白鳥の関係は、後で別の観点から触れるが、「塵埃」のモチーフは、このような発言を生む時潮とかかわっている。

(三)

白鳥は「塵埃」を創作する契機に「独歩集」（近事画報社・明38・7）との出会いをあげている。白鳥は「独歩集」を読んで「かういふ小説なら私にでも書ける」（前出「『処女作』の回顧」）と自信を得たと言うが、それは即座に「塵埃」の創作へ直結するものではなかった。「独歩集」を読む（「読売新聞」明38・8・2）では、白鳥の小説観自体が硯友社的なそれから完全に蟬脱しきれておらず、「この文集中の多くは小説でないかも知れぬ。」と留保条件を付けた賛辞となっていた。

ところが、独歩は『独歩集』に次ぐ第三短篇集『運命』（佐久良書房、明39・3）の出版によって、一躍文名を高める。『独歩集』を読んで自信をもった白鳥は、独歩評価の大きな変化に無神経ではなかったろう。白鳥と独歩の関係については、兵藤正之助氏『正宗白鳥論』や大岩鉦氏『正宗白鳥論』に詳しいのでそれに譲るが、私が注目したのは、独歩文学を新たに見直してゆく動きに藤村の発言が関与していたと白鳥が指摘していることである。

「塵埃」が発表された翌々月、白鳥は「独歩論」（「趣味」明40・4）において、独歩が盛名を得る「原因」を次のように述べる。

独歩集が出てすうあまり喝采されなかつたのに、「運命」が出版されてから急に持上げられたのは、「運命」の出る前に、島崎藤村氏が読売新聞記者の名家訪問録に於て同氏の作を称讃されたのが、大なる原因ではなからうかと思ひます。

「独歩論」について注記すれば、ここには白鳥の誤解が一つある。

藤村は『運命』が出版される前に独歩を「称讃」した事実はない。これは白鳥の記憶違いで、実際は『運命』の出た翌月の九日「読売新聞」に掲載された前出「緑蔭雑話」においてである。それはともかく、白鳥が藤村の談話を重視しているのは興味深い。同様の回想を、白鳥は遙か後年の「独歩について」でも正確に繰り返している。藤村の発言は、長く白鳥の記憶に刻み込まれてゆく示唆深い見解を含むものであった。

「緑蔭雑話」は独歩について次のように言及している。

話は違ひますが、近頃の自然主義にも消極的と積極的の両面がある様です。自ら敗れたものや、世の中から斥けられたすたり者の間にも一種の面白味を見出して之を描く等は消極的の

方だと思ひますが、国木田君なんかの独特な筆に現れて居るのが之で、君の作物は皮肉な処もありますが新しいそして真に真面目な処がありますので、読む可きものとして人にも勧め自分でも愛読して居ます。是等の作は儼かに自然主義が起つてからの産物だと思ふのです。

藤村が自然主義を積極・消極の二つに大別して考えている背景には、文名を高めた独歩の文学に対して、「破戒」の意図の積極性を鮮明にし自負する気負いがあるう。この談話は、「破戒」の苦心談と今後の文学の方向について語ったもので、独歩文学を正面から論じたものではない。その主旨は、独歩の中期以降に次第に著しくなった現実主義的な作品（おそらく、『独歩集』の「女難」（「文芸界」明36・12）・『運命』の「酒中日記」（「文芸界」明35・11）・『運命論者』（「山比古」明36・3）等を念頭に置いたものと思われる）に登場する「すたり者」、人生の廃残者を描いた作品を自然主義文学の一性格を示すと見た史的評価と言える。吉田精一氏も同時代の独歩論の中で藤村の史的評価を重視し「この藤村の言葉有機縁として、広く評論家にとりつがれてそれが日本の自然主義一般の一特色と喧伝された」と述べて、自然主義文学の性格を規定する重要な視点を提起したものと見ている。藤村の独歩評価軸は、自然主義がその方向で成熟してゆく歴史的推移にも十分重なってゆくもので、それを白鳥が逸早く注目したのは、時流を見るに敏なジャーナリスト白鳥の鋭い直観を語る。

旧作を集めた『運命』は決して「すたり者」の文学とは言えない作品を多く含む。だが、「塵埃」執筆後になる白鳥の「独歩論」は、「酒中日記」を独歩の「標本的作物」と見、その外「すたり者」

の形象化と言える「女難」・「運命論者」にも言及し、「『独歩集』を読む」が、収録作品全般に目を向け思想表現の直截さを論じたのに比べて、はつきり批評の傾向を異にしている。この変化は、「緑蔭雑話」に注目し、塵勞の問題を「塵埃」に追究することが出来た結果、独歩文学が「緑蔭雑話」の「すたり者」の観点から見直されたのである。

(四)

白鳥も藤村とともに塵勞の問題に共通した着目をしていたわけだが、その具体的ならわれば、「破戒」と「塵埃」の影響關係として痕跡を残している。それは同時代評で生田長江が指摘していたことだが、「破戒」に登場する風間敬之進と「塵埃」の小野道吉の造型に見られる類縁性である。

三十数年校正係を勤めて老い朽ちた小野は、一夕、酒場で前途有為の予に意地も張りも無くした繰り言を語る。

よく原稿にある文句だが、碌々として老いつていふのは先づ私達のことです。一体碌々といふ文字は、先生方はどんな意味で遣つてゐるのか知りませんがね、私は「碌々」の中にはいろんなつらい思ひが打込まれてゐるんだと独り定めにしてゐるんです。碌々として老いつて、決して呑氣にはんやりして老いてゐるんぢやない。

生の意欲を摩滅させられ、魂のない「木彫の像」と化した小野も、その酔余の述懐ははしくも心に巣くつてゐる「憂色」と人生の負け犬の苦悶を包みきれないのである。「破戒」の敬之進も、時

世にとり残され生活の酸苦の中で精も根も尽きてしまった落伍者である。「破戒」第四章第六節には、遺瀨ない思いを丑松に訴える敬之進の述懐がある。

「噫。我輩の生涯なぞは実に碌々たるものだ。」と敬之進は更に嘆息した。「しかし瀬川君、考へて見て呉れたまへ。君は碌々といふ言葉の内に、どれほどの酸苦が入つて居ると考へる。

これははばそのまま小野道吉の言葉と重なる。この類縁性は、白鳥が「緑蔭雑話」を読んで注目していた独歩評價の視点と、「破戒」を読む（「読売新聞」明39・4・29）でその読後感を「丑松以外の人物にては敬之進最も活動し、丑松と性行境遇の対照をなすも面白し。」と述べていた風間敬之進像のリアリテイの反映である。

藤村の創作・談話に加えて、その後「運命」の圧倒的な反響が白鳥の目を人生の「すたり者」に向けさせ、その結果、「塵埃」において新聞社で日項目にしていたモデルにメスが入られるにいたつたのである。

(五)

「塵埃」はその冒頭から、編集局内部の喧騒が無飾で直截的な文体によつて粗描される。ぶっきら棒な乾いた文体で、人生を生活の一断面によつて凝縮する方法は、小品「玉突屋」（「太陽」明41・1）においてより純化した作品の完成を示すが、「塵埃」はこの短編小説の方法を自家薬籠中のものにした最初の作品である。新聞種に賑わう編集部の風景は、生活の種々相が雑然と渦巻いてゐる世相の縮図である。日頃、「壮語沢山の太平洋」を口にする記者の雑談は、

「情夫殺しの消息」で賑わっている。これは、彼等がその普段の口振りに似ず、新聞種を消閑の材料として興がる凡庸人の実態を出ないことを暗示する。話に熱をあげる三面担当の築島は、その「煤けた顔」が雑報あさりの日々を端的に示しているし、外交担当で「硬派」を自認する大沢も、「縁の割けた山高」の小道具によって、名士の壮言に追従する日常であることを動かせない。そこへ作者は、肥満した社中第一の呑気者津崎に、平素にない歳晩の感に沈み込ませ、塵勞の深さを意図的に強調する。結局、これら編集員は、二面担当の辛辣な警句家岸上の冷罵に要約できよう。

お互ひに銀座のほこりを毎日吸つて、ほこりの中の微菌に生血が吸はれつちまふまで生きてるんさ。つまり天寿を保つ者は済し崩しに枯れて行くんだよ。

腰弁生活の継続が精神をスポイルし、「枯木的人間」に追いやるわけだが、その岸上の冷笑が大沢に「岸上流の哲学」であると軽くいなされる所に、冷笑に無感覚な「済し崩し」になった編集員の実態が明らかである。

(六)

「塵埃」は、その冒頭から塵勞の深さが編集室内の風景と溶け合つて描き出される。このさながら黄昏の人生図を思わせる小説は、長谷川天溪が「幻滅時代の芸術」（「太陽」明39・10）などで声高に叫んだデイスイリュージョンの現実をあざやかに作品化したものと言える。「塵埃」のモチーフの一半を、編集室の落莫とした記者生活に探ることは、「塵埃」の周辺を論じて来たことから至当な

考えと言える。例えば同時代の批評の中で、独歩・白鳥の作品の特色を「人生の正面を描くといふよりもその裏面、即ち一層平凡にして一層醜穢且つ些末なる人生の事象にも、尚一大事の潜在せることを暗示せんとするもの」と論じた批評などその好例と言える。

しかし、私見によると、従来「塵埃」は塵勞生活に焦点をしばり、そこに結ばれた灰色の像を自明の意図として論じて来たのではない。白鳥には後年の「文壇的自叙伝」四で、発表時から繰りかえされて来た常套的批評に反駁した次のような文があることはこの際一考の余地があるう。

「塵埃」その他の初期の短篇について、片上天弦君は、たびたび好意ある批評を下してくれたが、私の作中に枯れ切つた人生観が宿つてゐると評されたこともあつた。三十歳になるやならずで枯れ切つた考へを有つてゐるのは変だが、「諦めの人生観を抱いて安んじてゐる」と多くの批評家から定評の如く云はれてゐたのも、私として首肯し難いのである。淋しく諦めたやうなことを、をりをり作中に仄めかしてゐるにしても、それははかなく消える空想の影であつて、私はまだすがすがしい諦めの境地を知らない。二十代に迷つてゐたと同様に六十に手の届いた今でも迷つてゐる。

片上天弦の批評は、「紅塵」を論じた「『紅塵』を読む」（「ホトトギス」明40・11）に徴すると「自棄的な愉快索漠の感」を作全体を貫く調子と読みとっており、白鳥が回想した文面に一致するものはない。が、その把握にさほど距離がないことも明らかである。確かに、白鳥文学はその出発期から虚無的な世界観の文学として論じられて来た。しかし、白鳥の反駁によると、作中に漂う「諦めの

人生観」は彼の本質である「空想」が常に破れてゆく結果起る本体の「影」にすぎない。白鳥が「すがすがしい諦めの境地」に達していないと力説しているのは、彼の生涯が「塵埃」の二十代から現在まで、懷疑と解説の意欲との間に揺れ続けていることを明言したものである。小野道吉を中心とした編集局員の生態に目を奪われていくかぎり、白鳥の反駁は十分説明しがたい。そこで、作中の予が占めている問題に視点を転ずる必要がある。

(七)

予は作中人物について批判的な目を終始保持させられた視点人物である。また、作品の末尾は塵勞生活者に対する予の心境でしめくられる。作中での役割り、小説の構成から見ても、予の形象の意味は、これまで軽視されすぎていた。予は中年の塵勞をうかびあがらせる単なる媒体ではあるまい。

予は「南米遠征の企ての破れてより、何か有望の事業に取りかゝる迄の糊口のために、或人の周旋でこの社の校正掛となつた」若者である。校正係になるまでの経歴に明らかたように、予の胸裏には人生に雄飛せんことを夢想する「撼天動地の抱負」がたぎっている。このような予の目には、当然のことながら小野道吉は言うまでもなく、他の人間も「枯木的人間」に陥る予備軍に過ぎず、いたずらに人生を腐蝕させている無自覚な人間と映らざるを得ない。例えば、「局外から」編集室の談笑を窺い、「外ながら」彼等の壮語に鋭く耳をすます姿に、その批判的な觀察ぶりと、彼らから一線を画して「立身榮達の道」を信じる自恃の心を読みとることはたやすい。

「塵埃」の構図は、現状を「どうかしよう」と思う予と「どうかなるだらう」と投げだしている作中人物をあざやかに対比するため、老若の差で構成されている。次の文は、作中人物を世代論の観点から対比した典型的な一節である。

明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の組であつて、今こそ破れ布子で髪蓬々としてゐるが、明年を思ひ明後年を考へれば、想像の糸は己れを中心に、幾百の豊かなる絵画や小説を織り出す、艶麗な景も浮べば、勇壮な潮も湧く。今二三日で四十歳になる、五十歳になると云ひながら、腰弁の身を哀れとも感ぜず、無駄話に笑ひ興じてゐる彼の人々の気が知れぬ。

ここに熱烈たる予の夢想家ぶりと腰弁境涯に身を持ち崩した老残の人間があざやかに対比されている。これは、稚氣に満ちた青年の力みと塵勞を無感覚になることでやり過ぐす人間がともに過度に誇張された対立として出されているとも言える。この人生の明暗は、いずれも白鳥の冷眼から批評を免れていないという考えもある。確かに予の氣負いは、塵勞の不可避に無頓着でいられる慷慨家の空気に過ぎず、酒場で小野に「雑誌なんかの成功談」を大真面目に論じたるその意氣軒昂振りが、アイロニカルな青年の戯画になっているという批評もある。上司小剣は前出「正宗白鳥論」で、予が「作者以下の人物」であることから、挫折を知らない夢想家予を否定的に見る。しかし、この時期の白鳥の評論を眺めると、世代論で構成された作中人物の対照は意識的なものであり、予の形象も当然否定的な意図になるものではない。「塵埃」が執筆されたと同年の「青年の勝利」（「読売新聞」明39・2・11）や「感想録」（「太陽」明39・10）などの評論が最も典型的である。一例を「感

想録」から引くと、「社会は一面青年と老人との衝突史ともいふべく、保守的姑息なる老朽を打破して、新進の青年が取つてこれに代らんとする也。」と述べていて、この時期の白鳥は社会の現状を世代交替論によって批判してゆく変革の主唱者であった。新時代の精神を体現した者の自覚が、「塵埃」で年少気鋭の予と中年の腰弁達のおからさまな新旧対照の構図として提出されているのである。この意味において、人生の勝者を渴望する予は、白鳥の感想録のストリートな小説化にはかならない。因みに、この作品の構図には、前出「『破戒』を読む」で、丑松と敬之進の「性行境遇の対照」に注目していた「破戒」の作中人物関係も影響しているだろう。

予は、人生の廢殘者小野の愚痴を聞きながら、その小野が眼中にないように杜詩の「短歌行、王郎司直に贈る」を高吟する。心遣りにせよ、「勢のよい血汐が全身に漲つて仄へ切れぬ」予の昂揚は、小野の酸苦とは無縁である。

しかしながら、「塵埃」の予は、上司の指摘しているように、作者白鳥が自身の十全な分身として形象したとは言い難い。予は白鳥内面の一部が拡大されたものである。「塵埃」の構図は、夢想家予とその背後に広がる一掃しがたい現実を見据える白鳥の複眼で出来上っている。人生の明暗を見ている白鳥には、前出の感想録とは異った「世の中の事は何もかもつまらなくなつてしまつた」（前出「紅塵」序）と言う索漠とした諦念も底流としてあった。それでは、予は白鳥の内面といかなる関係でつながっているのか。

同時代評で双絲は、翌日の予と編集室を描写した結末は不要で、小野を見送り立ちつくしている予の描写で完結すべきであったと評している。しかし、この理解は小野に焦点をしばらくすぎたあまり、

白鳥の意図をくみあげた見解となっていない。むしろ、結末の内風景とそれに対する予の心情を点綴することによってモチーフは完結したのではないか。

翌朝出社すると、昨晚鬱積した憂悶をもらした小野は、もとの「石地蔵」にもどり、他の編集員は相も変わらぬ気焰を吐き続けている。結びは、「己れには将来があると、心で慰めながら」張り合ひのない仕事に向かう予を描いて終る。それまでの予の意気軒昂とした覇気は、結末のしみじみとした哀感を湛える描写によって、自己慰撫ヘトーンを下げている。この変化は、「吾人は何時までも人生に対して初心者でありたい。」（「通人」）、「読売新聞」明37・10・25」と語った人生に処す初発の信条と、上京後十年間の歳月を回顧した「僕の今昔」（「読売新聞」明39・1・4）で、現実の中で青年の夢想が色あせ潰えてゆく幻滅とが相対立する内面の矛盾に起因する。白鳥の内面とは、前出「紅塵」序の索漠とした虚無感と、前記感想録に見られる止みがたい理想の渴望が背離し合う矛盾構造であった。白鳥は、予の情熱の肯定と、それに冷水を浴びせかけ諦念に誘う現実との間で揺れ続けていた。その結果、小野のように全てを「断念」することの出来ない白鳥の内面が、結末の「慰めながら」という自己慰藉に露呈していると見てよいだろう。その意味において、後年自分の「人生の見方」が「塵埃」以上に出て、はるないやうに思はれる。（「『塵埃』について」）「文壇出世作全集」中央公論社、昭10・10）と述べた自解は、前述の白鳥内面の矛盾構造が長く持続していたと見られるものである。また、同時代からの「定評」を否定した前出「文壇的自叙伝」の一節も、白鳥の生涯が発期から懷疑とそれを止揚するものへの渴望の間を彷徨する

ものであったことを証明する。「塵埃」は、結局のところ白鳥の生涯に渡るアンヴィバレントな内面の背離、精神の矛盾構造に根差す処女作であったと言えるだろう。(昭56・9)

注

- 1 上司小剣「U新聞年代記」の「第一景 当世百馬鹿」718頁参照。
- 2 以下の上司小剣「正宗白鳥論」からの引用は、筑摩書房・定本版『現代日本文学全集』30『正宗白鳥集』(昭42・11)所収本文による。
- 3 「塵埃」の脱稿時期は、「二十八歳の年末に書いて、翌年の二月の『趣味』へ出ました」(「処女作」の回顧)、「文章世界」大5・5と述べていることから、明治三十九年末である。
- 4 兵藤正之助「正宗白鳥論」(勁草書房、昭43・12)の第二章「作家白鳥の誕生——明治期(1)・大岩鯨「正宗白鳥論」(五月書房、昭46・9)の作品論ノート第一章「処女作の前後」参照。
- 5 『国木田独歩全集』月報第三号(鎌倉文庫、昭22・11)。以下「緑蔭雑話」と比較するため「独歩について」から引用しておく。
- 6 その後間もなく、島崎藤村が、「独歩の作品には消極的の人間がよく描かれてゐる」といふ意味で、彼を推讃した批評を、読売新聞に掲げた。これ等の批評が、独歩をして文壇に重きをなさしめる道を拓いたやうなものだ。
- 7 吉田精一「自然主義の研究」上巻(東京堂、昭30・11)28頁。
- 8 生田長江は「『紅塵』を読む」(『趣味』明40・11)で、両者の類似性について「蛇の目論」に於ける小野君は、たしかに『破戒』の中の何之進とやらが、居酒屋に這入り込むでるところよりも、より多く自然に描かれた。」と鋭い指摘をしている。
- 9 無署名「小説界」(「早稲田文学」明40・3)。
- 10 双絲「小説『紅塵』」(「明星」明40・11)。